

痛みを力に 未来へ

夏季ダボス会議で被災学生ら意見交換

世界の政財界のリーダーが集まって中国・大連で9月中旬に開かれた夏季ダボス会議に、東日本大震災で被災した7人の高校生や大学生が招かれた。痛みを復興への前向きな力に変えたいという思いを参加者と分かち合えたことで、7人は未来へのヒントをつかんだ。

会議では被災体験を伝えるプログラムがあった。仙台市の仙台育英学園高校1年の菅原彩加さん(16)は、宮城県石巻市の実家が家ごと津波に流され、がれきに挟まれた母を助けられなかった体験を語った。「迷った末、『行かないで』と言う母を置いて逃げました。こんなにつらいことはもう一生ないと思います」

約80人の参加者は涙を流して聞いていた。発表後に何人かから声をかけられ、「つらい体験を自分の言葉で伝えられるのは素晴らしい」「できる限りの協力をするから頑張ってください」と励まされたという。

地元では、中学のときの仲間が何人も亡くなった。仮設住宅で不自由な暮らしを続けている住民もいる。国際舞台に立つチャンスをつかんだ自分が体

伝わった思い もらったヒント

験を語ることで、復興への手助けを得られたらしい。そう思っただけで参加した。「津波を知らない人にわかってもらえないのか不安だったけれど、伝わったんだなと感じました」と菅原さんは語る。

7人は3年前の四川大地震で親を亡くした中国人の中高生3人も交流した。3人も地震の話をする時以外は楽しそうに、前を向いて生きていくと東北大3年の近藤一樹さん(21)は感じた。自身も岩手県大船渡市の実家が津波で全壊した。「震災で被害を受け、家族が亡くなったからといって必ずしも暗い人生になるわけではない。その思いは共通だと思った」

近藤さんは防災や復興について話し合うプログラムにも参加した。雇用創出や若者の地域離れなどの震災前からあった課題を克服するため、「世界的に注目が集まっている被災地・東北を、ブランドとして生かせないだろうか」と投げかけた。すると「そういう発想の転換は大切。ダメージを受けたことは、見方を変えればチャンスになり得る」と評価してくれる人がいた。近藤さんはいま、「まちが壊れたからこそ、より良いまちを一からつくりたい。復興は自分たちの世代の義務だ」と考えている。

やはり大船渡の実家が津波で全壊した岩手大1年の志田潤平さん(19)は、津波に強いまちづくりのヒントを得ようと参加した。都市計画を話し合うプログラムで、「防災に優れたまちづくりのためにどうすればいいか」と質

問した。すると、シンガポールからの参加者が「シンガポールは地球温暖化の影響で水面が上昇して困っていた時、他国の人と情報交換する中で対策を見いだせた」と応じた。志田さんは、外国の人たちの意見や考えも取り入れながら都市計画を学びたいと、留学を考え始めている。「日本でも外国でも、もう津波被害を繰り返したくない。被災者の視点を生かしてまちづくりを学び、国際社会の役に立ちたい」

(斉藤純江)



夏季ダボス会議に参加した近藤一樹さん(右端)と、志田潤平さん(右から4人目)、菅原彩加さん(左端)。(ピョン・ドゥモロー提供)